

常に問われる立ち位置

白杵 陽（うすき・あきら）

日本女子大学文学部史学科・教授



地域研究者の軌跡

- ① 生年・出身地……一九五六年、大分県
- ② 専門分野・地域……パレスチナ／イスラエル、ヨルダン、レバノン
- ③ 学歴……東京外国語大学外国語学部（アラビア語）、東京大学大学院総合文化研究科（国際関係論）、京都大学博士（地域研究）
- ④ 職歴……在ヨルダン日本大使館専門調査員（二八歳、二年半）、大学講師・助教授（三二歳、七年間）、エルサレムの大学研究機関研究員（三四歳、二年間）、大学共同利用機関助教授、教授（三九歳、九一年半）、大学教授（四九歳、六年間）
- ⑤ 現地滞在経験……ヨルダン（専門調査員、二年半）、イスラエル（研究員、二年間）、レバノン（研究員、半年間）

メッセージ

私はもともとパレスチナ委任統治期のアラブ現代史研究から出発したが、地域研究を強く意識し始めたのは初めて就職した佐賀大学で「アジア社会論」という講義を受け持った時からであった。社会学教室に属して同僚は社会学と文化人類学が専門だった。だからこそ研究者として自分のアイデンティティは何なのかを考えざるをえなくなった。それまで専門は歴史学＋国際政治学（アラブ現代史）だとナイーブに答えていた。ところが、同僚には歴史学も政治学も担当教員がいるのである。苦肉の策ではあったが、一九八五年に設立されたばかりの日本中東学会にすでに入会していたので、以来、積極的に「中東地域研究者」と名乗るようになった。「アジア社会論」の講義でも地域研究を前面に出し、地域としてのアジアあるいは中東をどのように見るべきなのか、方法としてのパレスチナは可能なのかといった、学生に「地域」に生きる意味を問うような講義を行うようになったのである。

佐賀大学在職中に国際文化会館の新渡戸フェローとしてエルサレムに二年間、留学する機会を得た。それまではアラビア語を使ってパレスチナ研究を行っていたが、ヘブライ語のイスラエル研究にも足を踏み入れたのである。世間では「敵対」関係にあるとみなされている人々が住んでいる同一の地域をどのように呼ぶべきなのかという問題が新

- ⑥ 研究方法……主にインタビューと参与観察
- ⑦ 所属学会……日本中東学会、日本国際政治学会、日本イスラム協会、史学会、歴史学研究会など
- ⑧ 研究上の画期……一九九一年一月に勃発した湾岸戦争時、乳幼児二人の子供を含めて家族と共にエジプトに一ヶ月半避難することになり、戦争のためとはいえエルサレムという現地研究の最前線から離れることの意味を考えさせられた。九・一一事件では護教的な議論の是非を含む「イスラーム」の語り方を問い直すきっかけになった。
- ⑨ 推薦図書……板垣雄三『歴史の現在と地域学——現代中東への視角』（岩波書店、一九九二年）は、問題提起的な「地域」論を含み、地域とは何かを考える立場性を絶えず問う必読の論集である。

たに浮上した。アラブ人やユダヤ人の友人・知人の顔を一人ひとり思い起こしつつ、ずっと悩み続けたが、結論として「パレスチナ／イスラエル」と表記することにした。というのも、イギリスによる委任統治期パレスチナの歴史的事実を踏まえ、その領域には現在、イスラエル国家とパレスチナ自治政府の並立という政治的現実が存在するからである。この呼称は一九九三年のオスロ合意以降、日本でも人口に膾炙するようになったが、やはり同一地域を違う名称で呼ぶ紛争地域に関して、双方の側から内在的に研究することの意味を問い直さざるを得なかった。生半可なレベルでの「中立」的立場などを許す研究対象ではないので地域研究者として方法論に関しては現地の人びとを通して常に問い直し続けることになった。

ユダヤ人にしろ、パレスチナ人にしろ、ディアスポラの民である。そのような人々の抱え込む諸問題と向き合うときには研究対象地域はたえず越境をとまなうという現実がある。研究者としての立ち位置も問われる。そんな経験を経て、今は日本と中東イスラーム地域との関係を歴史的に問い直す作業を行っている。また講義では学生に、日本という（場）において中東やイスラームを学ぶ意味は何なのかを常に自らに問い直し、地域に生きる個々人の具体的な姿を通して認識する姿勢を持ち続けることが肝要だと強調している。